

次の——線部の漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

- 1 農耕文化が定着している。
- 2 車の往來に注意する。
- 3 非常時に備えて待機する。
- 4 天高く馬肥ゆる秋。
- 5 熱いお茶を注ぐ。

次の——線部のカタカナを漢字に直して答えなさい。

- 1 おだやかなクチヨウで話す。
- 2 列車がテッキヨウをわたる。
- 3 古い制度をカイカクする。
- 4 協力をココロヨク引き受ける。
- 5 毎月の会費をオサめる。

それは父のような肉体労働者の手だった。大人の男の人の大きな手だった。

近所の大きなおじさんに頭をなでられたりすると、子供は一瞬のごとく金縛り状態になり、次には必死にしつぽをふり続ける子犬になっていた。グロープのような大きな手を意識すると頭のとっぺんに、永遠に差の縮まらない徒競走をしているようなくやしさと、どうやっても勝てないことのうれしさが、同時にやってきた。

4 「大人の手」には、絶対があった。

5 道具としての、生きてきた過程が深く刻まれた固く分厚い手には、近所のお兄さんの手が小僧っ子の手にしか見えないほどの、野太さと力強さがあった。

昔の大人は働くことでせいっぱいだったから、決して一緒には遊んでくれなかったけれど、子供たちは別にそれに対して、不満を口にすることもなかった。世の中が貧しくて、親がどれほど必死に体を使って働いているかを、子供ながらにわかっていたからだ。

そんな状況の中で、子供がわがままを言っても、ぶんなくられるのが関の**B**だった。

おつかなくて、迫力のある「大人の手」が、身近にゴロゴロと転がっていた。その手はツルハシの柄をがっしりとぎっていたり、ロープを力いっぱいひっぱっていたり、両切の煙草を無造作に指の間にはさんでいたり、なみなみとつがれた焼酎をこぼさないようにコップをつかんでいたり、なぐり合いのけんかのときには、うなりを上げてふり回され、陽気な酒の席では野卑な笑いや唄に混じって、両の手のひらが乾いた音

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(ただし、抜き出して答える問題では、句読点は一字として数えないこと。)

1 子供のころ、私は自分を子供だとは思っていなかった。

大人の口から「こども」という言葉が出てくると、思わず後ろをふり返りたくなったりした。自分は半分大人みたいなものだから、ふり返れば後ろに本当の子供が立っていると思っていた。だから自分が十歳であっても、近所の二十代のお兄さんには、当然のようにタメグチをきいた。何をしても負けるくせに、口ではなにかと対等に張り合おうとした。

それがどうしようもなくなくなるのは、力比べのときだった。

精神的にはいくら大人ぶってみても、いざ体の大きさや力加減を知らされる段になると、はずかしいくらいにひたひたに差に対して、己がどうあがいても「こども」であることを思い知らされるのだ。それでも気を取り直して、お兄さんの目の前に小さな力こぶを見せて、「ほら、ほら。」と子供の私は子供らしさから逃れようとした。それが昔の子供だった。

力では負けていても、子供には子供の言い分があった。

大人は背が高いとか、腕が太いといったことは、子供にとってはあまりにも当然のことすぎて、象は大きくて鼠は小さい、というのと同じことではなかった。だからそういうときには、元々の大きさが逆転したら変だろうが、という発想で開き直った。

しかしそんなめちやくちやに自己中心的な子供の物差しをあてがっても、ひとつだけ、どうしてもこれは勝てないと思えるものがあった。

をさせて打ち合わされていた。

あのころ私は大人の大人である部分を、顔ではなく手で判断していたと思う。

だからどうていかなわれないと思わせる肉体労働者の節くれた指と、分厚くこつ大きい大きな手こそが、本当の「大人」の証しなんだと自然に思うようになっていた。自分の周りでは、それ以外の種類の手に接することがなかった。だから大きくなれば、自分の手もいつかはそうなるものだと思っていたし、そうなりたくないとあこがれていた。

十一歳の冬のことだ。風は外でゴゴと音を立てて吹き荒れ、粉雪を巻き上げて、道も家も空も白い雪煙の中にかくした。そんな日に外を散歩する人などいなかった。

そんなひどい吹雪の日に「ごめんください。」と、玄関で人の声があった。母が玄関に面した、柄入りのすりガラスのはまった障子戸を開けると、そこには二十代らしき男の人が、雪まみれの防寒服の雪をはらいながら立っていた。

その人は玄関先で、はいてきた雪まみれの黒い長靴の向きを変えて並べると、*上がりがまちに防寒服をきちんとたたんで置いた。その人がさつき立っていた三和土の上には、はらい落とした雪で小さな山ができていた。

「どうもごぶさたします。」と茶の間に入るなり、部屋の暖かさで雪がとけて髪の毛を額にくっつけたままのお兄さんは、ひざを折っていいいな挨拶をした。母や祖母は親戚の人らしく親しそうな接し方をしていただけれど、私たちはその人の顔を見るのははじめてだった。

しかし、そんなことはどうでもよかった。私たちの関心は、もうすでに別なところに向いていた。

玄関に立っているときから、お兄さんが小脇にかかえていた風呂敷包みに、目が行っていたのである。挨拶をするために横に置かれた、その土産の中身が早く見たかったのである。

母が、となりの部屋から顔を出している私たちに、おまえたちも挨拶ぐらしいなさいと言った。その言葉を合図に、私たちは少しずつひざを進めて、お兄さんの向かい側に座る母のすくなめ後ろに、いい子を装って座った。私たちのきこえない挨拶に、お兄さんは小さく笑った。

子供の儀式が終わると母は、沈黙は損とばかりに、ばあちゃんやお母さんたちはみんな元気なの、とまた話を再開した。

私たちは、もうなにもすることがなかった。あとはお兄さんが、話の切れ目をうまく使って風呂敷の包みを解き、中ものを予定通りに母の前に差し出すのを待つだけだった。

「アラー、こんなまていなことしなくてもいいのに。」

話の長さに退屈していた私たちが、母の後ろでつき合いをしていると、少し高くなった母の声がした。あわてて前を見ると、お兄さんが母の方へ菓子折りの箱を押してよこすのが見えた。母は、いつもの語尾を長くのばした儀礼的な言葉を使った。

そのとき私は、さつきから目に入っていたのに、まるで気がつかなかったかのようにふるまう母の姿を見て、大人つていうのも大変だなど思った。

私たちは次に、母が言うはずのいつもの言葉を待った。

われないように注意しながら視線を上下させた。母も気がついていたのか、世間話の合間に「あんた、手きれいだねエ。」という言葉をはさんだ。お兄さんはそう言われたにもかかわらず、特別はずかしそうでも意識しているふうでもなかった。

私はその反応を確認してから、ようやく安心して、母の後ろで自分の手をながめた。いくらかのおどろきの波は去って落ち着くと、今度は寄せる波に気持ち悪さと、どこかさげすむような気持ちのつかってやってきた。

頭の中で、男のくせにとか、なまっちよろい、気持ち悪い、おとこ女といった言葉が走り回るようになった。私はいつの間にか、お兄さんの手を否定し始めていた。そして今までの男つぼさの価値観から、はるかにかげはなれた手に嫌悪感すらいだきはじめていた。

その日以来、私は自分の手を妙に意識するようになった。

あんな手にはなりたくないという決意が、頭の中に印をつけたようだった。というのも私の手は子供のせいか、お兄さんの手の白さややかさに近かったし、前々から他の子よりもすりとした軟弱な指であることに、自分でも嫌々ながら気がついてきたからだ。

私の指は長く、甲に血管も見えず、爪もきれいな楕円形で、本当に男の子らしくなかった。だからお兄さんの手にいち早く反応したのだった。

このまま大きくなると、自分の手もやがてあのお兄さんのようになるのか、という恐怖感があった。私は父のような手になりたかったのだ。ごつい手になりたかったのだ。だから私は、それから長いこと自分の手をいじめ続けた。

「じゃあ、これ遠慮なくちようだいするけど、ホントにもうこんなことしないでよ。」

「ほらこれ、おまえたち、だれか仏壇に上げてきなさい。」

「上げたら、ちゃんとチーンって鳴らすんだよ。」

二人の弟は母から手わたされた菓子折りを一緒に持つと、いそいそと仏壇のある床の間の部屋に消えた。少ししてチーン、チーンという鐘の音が、となりの部屋から聞こえた。私だけがいつもの我が家の慣例行事には参加せずに、母の後ろに座ったままだった。

他のことにすっかり気を取られていたからだ。土産を差し出したときに見えたお兄さんの手から、おどろいて目がはなせなかったのである。

女の人の手のように見えた。見直してみても、**C** 錯覚ではなかった。男なのに女の手だった。それは土産を受け取った女である母の手よりも、**D** 白くやわらかく見えた。すらりとのびた指には、普段目にするような、体を使って働く男特有のごつい節くれがなかった。指はあくまで細く長く、爪も上品な楕円形をしていた。

私はその手を、見ないようにしながら見た。そして考えていた。

どんなに思いめぐらしても身近にいる若い女の人の中でも、お兄さんの手をこえるようなきれいな手の持ち主を、思い出すことができなかった。だから私のとまどいはなかなかおさまらなかつた。顔を見るとそこらにいる男のひと何ら変わらないのに、視線を下に持つていくと、どうしても手は女性にしか見えなかつた。

その見た目の、常識的な男女差をひっくり返すような手に納得のいかない私は、母の体の後ろから何気なさを装って顔を出し、ぶしつけと思

思春期は、なかなかごつくなくなってくれない自分の手に、腹を立てて過ごした。

いつも頭の中には、あのお兄さんの手と、父の手があつた。

(坂川 栄治『遠別少年』による)

*上がりがまちら玄関の上がり口にわたした横木。

*三和土玄関の土間。

*まていなていねいな。北海道地方の方言。

問一 —— 線部2「段」とありますが、これと同じ意味の熟語として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 段差 イ 段階 ウ 算段 エ 手段

問二 Aに入る慣用句として最も適切なものを次の中から選び、記号

で答えなさい。

ア 蛇へびにひられた蛙かえる

イ 張り子の虎かみかみ

ウ 馬の耳に念仏

エ 鶴つるの一声

問三 Bに入る最も適切な漢字を一字で答えなさい。

問四 —— 線部8「いそいそ」とありますが、このことばの意味として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 心のはやるようす

イ ときばきとしたようす

ウ 元気のないようす

エ さりげないようす

問七 —— 線部3「めちやくちやく物差し」とありますが、このことを説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 都合よく大人の部分と子供の部分を使い分けて、大人に勝てそう

イ 大人に負けない部分では張り合うくせに、かなわない部分ではへりくつをこねて負けを認めようとしないうこと。

ウ 大人にかなわない部分はきっぱりと負けを認めるのに、勝てそうなどときにはそれが当然のようにふるまうこと。

エ 勝負しないときには大人のようにふるまい、大人に張り合わなければならぬときはへりくつで逃れようとする事。

問八 —— 線部4「大人のうあつた」とありますが、「大人の手」を説明したものとして適切でないものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「大人の手」は生きてきた過程が深く刻まれた道具であり、男らしい迫力をたたえていた。

イ 「大人の手」は子供の「私」にどうしてもこれは勝てないと思わせるものだった。

ウ 「大人の手」は肉体労働をするときの道具として扱われており、それが本当の「大人」の証しだった。

エ 「大人の手」は子供に恐ろしさを感じさせるものであると同時に安心させるものでもあった。

問五 C・Dに入ることばの組み合わせとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア C—どうやら D—きつと

イ C—まさか D—とても

ウ C—やはり D—むしろ

エ C—なぜか D—ずつと

問六 —— 線部1「大人のうなったりした」とありますが、このことを説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ふだん大人ぶっていても結局自分は子供だという気持ちが消えないことであらわれ。

イ 「こども」という言葉が自分を指して使われているのを自覚していないことであらわれ。

ウ 「こども」という言葉によって自分をばかにする年長者に反感をいだいていることであらわれ。

エ ふだん大人ぶっているためにいざというときも自分が子供であることを認めようとしないうことであらわれ。

問九 —— 線部5「道具としてのう分厚い手」とありますが、このことが具体的に表現されている一文を文章の中から抜き出し、その最初の三字で答えなさい。

問十 —— 線部6「子供の儀式」とありますが、この説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 大人からよく見られようとする形ばかりのふるまい。

イ 大人が決めた難しい作法にがんじがらめになったようす。

ウ 子供なりのお客様に対する心のこもったもてなし。

エ 子供が必ず身につけなければならない大切な習慣。

問十一 —— 線部7「大人っていうのもう思った」とありますが、このときの「私」の気持ちを説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア いつも長時間の世間話をしてお世辞を言わなければならない大人の付き合い方にうんざりする気持ち。

イ 付き合いの上で本音をかくして決まりきったふるまいをしなればならない大人のやり方に興ざめる気持ち。

ウ 本当はお土産が気になるのにそれをひた隠しにしてさくられまいとする母親をねぎらう気持ち。

エ 大人どうしの付き合いに欠かせない社交の決まりごとを忠実に実行する母親を尊敬する気持ち。

問十二 —— 線部9 「私は、見た」とありますが、この理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア その日会ったばかりでまだあまり知らないお兄さんについて、その美しい手を見ただけであれこれと深く探ることは大変に失礼なことだと考えたから。
- イ 顔は男なのに女のような手をしているお兄さんを見てると自分の中の常識的な感覚がくずれていき、あたりまえだと思っていたことが否定されるような気持ちの悪さを感じたから。
- ウ 想像を絶する美しい手を持っているお兄さんはせまい世界で暮らしている私にとって不気味な存在であり、その手をじろじろ見ることにおそろしさを感じたから。
- エ お兄さん自身も男に似つかわしくない美しい手であることを気にしている可能性があり、その手をじろじろ見ることで嫌な思いをさせてしまうと考えたから。

問十三 —— 線部10 「男っぽさの価値観」とありますが、この価値観にあてはまる手がそなえている性質を、これより前の文章中から七字で抜き出し、その最初の三字で答えなさい。

問十四 この文章は内容上二つに分けられますが、どこで分けるのが適切ですか。その後半の最初の三字で答えなさい。

四 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(ただし、抜き出して答える問題では、句読点は一字として数えないこと。)

1 文学作品の中でも応答に関することが述べられていることがありますが、夏目漱石の『三四郎』でも次のようなくだりがあります。三四郎が上京するとき、汽車の中で「水蜜桃」を一緒に食べながら話をする場面です。

2 「法科ですか。」
「いいえ文科です。」

3 この「はあ、そりゃ。」とまたいった。三四郎はこのはあ、そりゃを聞くたびに妙になる。向うが大いに偉いか、大いに人を踏み倒しているか、そうでなければ大学にまったく縁故も同情もない男に違いない。然しそのうちのどつちだか見当が付かないのでこの男に対する態度も極めて不明瞭であった。(夏目 漱石『三四郎』)

4 「はあ、そりゃ。」を言う人物は後に出会う、ユニークな「広田先生」です。応答のしかたについても三四郎に細かく観察させて描写しています。「はあ。」だけでなく、「そりゃ(＝それは)」と加えることで、単に外面的に感嘆しているふりをするだけの返事なのか、そのあとに何か言葉が続くようなのが微妙にはぐらかされています。このように、ちよつとした応答の表現にも注意をはらって、人物を描くところ、さすがは漱石と言えるのかもしれない。

5 「はあ。」そのものも、ちよつとあいまいな応答と言えます。(君、カレーは好きですか。)と突然聞かれて) ↓「はあ……。」

問十五 この文章の内容として正しいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「私」は子供ながらに自分の弱さをよく知っていたからこそ、何でも実現してしまう力強い大人の手にあこがれた。
- イ 「私」にとって本当の大人は決して子供を甘やかさないとても恐ろしい存在であり、頼ることはできなかった。
- ウ 「私」がお兄さんの手に嫌悪感を感じたのは、お兄さんの軟弱な手と自分の手が似ていたからだだった。
- エ 「私」はお兄さんの男らしくない態度にその軟弱な手の印象を重ね、お兄さんの存在を否定し始めていた。

のように、事情がよく飲みこめていない場面での、「はい」相当の断定的応答という意味で使われることもありますし、

(「私は七カ国語が話せるよ。」と言われて) ↓「はあ、すごいですね。」のように感嘆する場合もあるでしょう。(「はああ……。」とのぼすこともあります。)

5 こうした応答表現は、イントネーションや声の力み具合などで、あまり興味がないようにも、興味があるようにも聞こえます。「はあ、すごい！」と言うときは、のどの奥に力を入れて、ちよつとおどろく感じを出しますが、「カレーが好きか。」と言われて、ちよつとびつくりして「はあ。」と言うときは、それほど力を入れない発音になるように思われます。また、そのいずれかがわからないような発音のこともあります。さきほどの『三四郎』の例などは、まさにいずれかがわかりにくい発音という設定なのでしょう。

6 なお、この用法とはまったく違う用法の「はあ。」もあります。「はあ？」と後ろを高く上げる用法です。この応答をされるとあまりいい気持ちがないのは私だけでしょうか。前にも述べたように、発音のしかたも意味の違いに関わる重要な手がかりです。

7 話を聞くときに、応答は大変重要ですが、逆に、応答しきしない、ということになると、話が流れなくなります。適宜、感想を言ったりして、相手の感情に共感することもあっていいでしょう。

8 たえば、「昨日、傘を持っていないのに、突然、雨が降り出してきた。カバンも服もずぶぬれ。また、その日に限って、布製のカバンだった

から、中の本までぬれちゃった。」

というような話を聞いているとき、いくら新情報だといっても、

「A」

だけでは、共感して聞くことにはなりません。まして、

「B」

のような「高みからの、共感のない、教訓」のような反応だと、うんざりしてしまいます。親子の会話だとこういう会話も多いような気がするのですが、どうでしょう。

9 そういう反応ではなくて、たとえば、

「C」

とか言つて、相手の気持ちに「共感」すると、話すほうも、何か救われます。もちろん、

「D」

のように、続きを聞くこともあっていいでしょう。

10 会話は情報の伝達でもありますが、それだけが目的となつていくわけではなく、情報の伝達を通してお互いに感情を通わせる、ということがむしろ大切なこともあります。いいことなら、「それはよかつたね」、大変なことなら、「それは大変だね。」というような、相手の感情に配慮した感想を言うというのではないのでしょうか。必ずしも長い言葉はいりません。ほんの一言でもいいのです。何か相手の気持ちを察した共感の言葉を入れることも、広い意味での「応答」として大切なことなのです。

11 では、もし、本当は内容的に共感できない、というような場合はどうすればよいのでしょうか。たとえば、

のように、直接のコメントをさける応答です。一応話は受け止めながらも、直接のコメントをさけます。こうすることで、責めることも、迎合することもしなくて済みます。

14 もう一つは、^d確認的応答です。たとえば、
「小さなゴミを通勤途中にコンビニのゴミ箱に出しちゃったことで、ちょっと罪悪感を感じているんだね。」
のような応答もあるかもしれません。よけいな感想をあえてはさまない聞き方です。

15 どの応答がよい、などということは、時と場合によることなので、必ずしも決まっています。ただ、会話の中で、応答だけではなく、具体的反応も大切だということが言いたいのです。会話には「心の通わせ合い」という側面もあるわけですから、ぜひ、どういうふうにして、広い意味での人間的共感を深めるか、も考えながら反応を返してください。

(森山 卓郎「コミュニケーションの日本語」による)

*水蜜桃¹桃の一種。

*縁故²つながり。

*適宜³その状況に応じて。

「この前、自分の家のゴミを駅のゴミ箱に捨てている人がいたんだ。いけないと思うんだけど、私も、この前、ゴミ収集車に間に合わなかったんで、小さなゴミを通勤途中にコンビニのゴミ箱に出しちゃった。」

というような話を聞くとき、聞いているのが正義感が強い人の場合、「おいおい、そんなことすれば店の人だって困るから、いけないよ。」

とすることもあります。こんな場合は正義派の^a応答とでも名付けることができるでしょう。それはそれでたのもしいものです。内容によっては、きちんと「それはいけないよ。」と^b言つてあげることも必要です。ただ、人間関係としては、「共感的」な^c感じはしないかもしれません。

12 逆もあります。聞いているのが正義感よりも対人関係を優先してしまつてタイプであれば、たとえば、

「次の収集までゴミを置いておくとおうからね。」

のように言うかもしれません。この場合は、共感的な感じはありませんが、正義感はまだ感じられません。これは^b迎合的応答と名付けましょう。迎合的応答は、自分の正義感だけを強くなりかささない答え方とも言えますが、相手がどう考えてもマナー違反^dをしているような場合は、逆に、少し言いにくいものです。

13 その中間的な応答もあるような気がします。一つは、^cずらし的応答です。

「東京都のゴミは年間約四百万トンだったつて、すごい量なんだよね。」

問一——線部1「夏目漱石」とありますが、この人物の作品でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ころも
- イ 吾輩は猫である
- ウ 鼻
- エ 坊っちゃん

問二——線部2「くだり」3「はぐらかされて」とありますが、それぞれのことばの文章中の意味として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

2 くだり

- ア 物語のきつかけ
- イ 文章の流れ
- ウ 文章のある部分
- エ 物語の終わり

3 はぐらかされて

- ア ごまかされて
- イ かくされて
- ウ 裏切られて
- エ 考えさせられて

問三 — 線部6「あげる」7「ない」が文章中と同じ意味で用いられているものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- 6 あげる
- ア 長時間かけて作品をしあげる。
 - イ 友人を助けてあげる。
 - ウ 職人として一人前に育てあげる。
 - エ 車が雨水をはねあげる。

7 ない

- ア 昨日の事件について思いあたることがない。
- イ 気軽に口にする心ない一言が人を傷つける。
- ウ すぐに消えてしまう火花のはかない美しさが好きだ。
- エ 身近な親切心にはなかなか気づかないものだ。

問四 [2] の段落で描かれている場面を説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 三四郎は自分が大学生であることを伝えたいので、返ってくる反応によって相手がどんな人物であるか判断しようとしたが、あまいな反応しか返ってこなかったため手がかりが得られずとまどってしまった。

イ 三四郎は自分が文科で学ぶ大学生であることを伝えたいので、返ってくる反応によって相手の地位の高さを知ろうとしたが、相手が見下されていると感じてしまった。

ウ 三四郎は自分が上京してきた大学生であることを伝えたいので、返ってくる反応によって相手がどこまで大学について知っているか探ろうとしたが、相手はまったく関係ないような反応であったためがっかりしてしまった。

エ 三四郎は自分が文科の大学生であることを伝えたいので、その反応を受けて話を広げていこうと考えていたが、相手の反応が素っ気なく自分に関心を持っていないようであったためやる気を失ってしまった。

問五 — 線部4「イントネーションや、聞こえます」とありますが、これと同じ内容を述べている部分をこれより後の文章中から三十字以内で抜き出し、その最初の三字で答えなさい。

問六 — 線部5「カレーが、言うとき」とありますが、この応答の仕方について端的に説明している部分を文章中から三十字以内で抜き出し、その最初の三字で答えなさい。

- 問七 [] A～Dに入ることはとして最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。
- ア ばかだね。いつも傘を持ち歩かないからだよ。
 - イ ふーん、あ、そう。
 - ウ で、どうしたの？
 - エ うわ。大変。

問八 — 線部a「正義派的応答」b「迎合的応答」c「ずらし的応答」d「確認的応答」とありますが、それぞれのことばの説明として正しいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 正義派的応答は相手の気持ちを考えてそのときにふさわしいことばを用いる、たのもしい応答である。
- イ 迎合的応答は相手と対立しないで自分の考えを伝えることのできる応答だが、正しい意見は伝えられない。
- ウ ずらし的応答は相手の気分を害すことなく自分の言いたいことを伝える、便利な応答である。
- エ 確認的応答とは相手の気持ちに配慮した言い回しであるが、自分の考えを伝えることはできない。

問九 — 線部a「正義派的応答」b「迎合的応答」c「ずらし的応答」d「確認的応答」とありますが、これらをひとまとめにして表したことを文章の中から五字で抜き出して答えなさい。

- 問十 この文章中の筆者の意見として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。
- ア 返答は発音の仕方の意味が変わってしまうので、いつもはつきりした声で行わなければならない。
 - イ 会話をするときは相手の気持ちに応じた返答の仕方になるよう工夫して、心の通わせ合いを実現させることが大切である。
 - ウ 応答の仕方にはいろいろなやり方があるが、どんなときも相手の気持ちを優先させなければならない。
 - エ 話を聞くときには相手に共感できない場合でも、相手の気持ちを察した共感の言葉を入れるのが正しいやり方である。

問十一 次の一文が入る最も適切な箇所を文章の前半部分から探し、その直前の文の最後の三字で答えなさい。

このような言い方になると、相手の言うことが理解できないというような、まったく違う応答になります。

問十二 この文章を内容の上で四つに分けたものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|----|----|----|----|----|
| ア | 1 | 4 | 5 | 10 | 11 | 14 | 15 | |
| | 1 | 4 | 5 | 10 | 11 | 14 | 15 | |
| イ | 1 | 6 | 7 | 10 | 11 | 14 | 15 | |
| | 1 | 6 | 7 | 10 | 11 | 14 | 15 | |
| ウ | 1 | 4 | 5 | 7 | 8 | 9 | 10 | 15 |
| | 1 | 4 | 5 | 7 | 8 | 9 | 10 | 15 |
| エ | 1 | 6 | 7 | 9 | 10 | 11 | 15 | |
| | 1 | 6 | 7 | 9 | 10 | 11 | 15 | |

問十三 この文章を説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 具体的な会話のやりとりを示しながら説明していくことで、読者にわかりやすくなっている。
- イ 言葉の使われ方を歴史的な立場から説明しているので、説得力のある文章になっている。
- ウ 実際の体験を交えながら面白おかしく語ることで、読者の興味を引きつけている。
- エ 会話をするときの原則を専門用語を用いながらはつきりと示しているので、論理的な文章になっている。

五

次の1～5の文について、ことばが正しく使われているものは○、そうでないものは×で答えなさい。

- 1 後ろ髪を引かれる思いで、ふるさとを出発する。
- 2 反則してまで勝とうとするなんて、選手の風下にもおけない。
- 3 説得力のある友人の話にたびたびあいつちを入れる。
- 4 敵のすきを見て、いざ鎌倉とその場を逃れた。
- 5 努力がむくわれたことに感極まって涙を流した。

国語解答用紙

受験番号

番

氏名

解

答

得点

五	四					三			二	一	
1	問十二	問八	問七 A	問四	問一	問十一	問六	問一	1	1	
2			B		問二 2	問十二	問七	問二	2	2	
		問九			問五						
3	問十二		C		3	問十三	問八	問三	3	3	
4			D		問三 6	問十四	問九	問四	4	4	
	問十三	問十		問六							
5					7	問十五	問十	問五	5	5	
									(く)	(ゆる)	
									(める)	(く)	
											得点

合計

--	--